

審査の結果の要旨

氏名 大愛 崇晴

本論は、古代、中世、さらにはルネサンス期にいたるまで、西洋における音楽観の中核をなしていた数学的音楽理論の系譜について、16世紀末から17世紀末にかけてのイタリアを中心に検証し、そこにみられる変容の歴史的意義を解明しようとした論文である。

協和音などの音程関係の中にある数比は、古来、宇宙や人体など、森羅万象の根源にある秩序をあらわすものと考えられた。その関係を解明する数学的音楽理論は、天文学などとも結びつきつつ、世界に関する知の体系の中で重要な位置を占めた。しかし、近代科学の出現などによって西洋文化の枠組み全体が大きく変質してくる中で、音響物理学や感性的認識論に取って代われ、やがて世界の根源を探る知としての位置づけも失うことになった。

本論では、その変化の過程を解明するために、16世紀の最も著名な音楽理論家であるジョゼッポ・ザルリーノ (1517-90)、フィレンツェの「カメラータ」の中心メンバーとして音楽の革新に貢献した音楽家ヴィンチェンツォ・ガリレイ (1520s-91)、「ケプラーの三法則」など、近代天文学の祖として知られるヨハネス・ケプラー (1571-1630)、ヴィンチェンツォの息子でやはり近代科学の創始者の一人とされているガリレオ・ガリレイ (1564-1642)、それに加えて、ボローニャの数学者ピエトロ・メンゴリ (1625-86) の音楽理論が検討される。その結果、これらの論者が、新たな科学的知見を取り入れたり、音楽実践の新しい動きに対応した変革を試みたりする一方で、それを旧来の数比的音楽理論の思弁的伝統と調停させる様々な試みを行っている実態が明らかにされた。

西洋には古代以来、数学的音楽理論の長い伝統があり、近代に至る過程の中でそれが失われたということ自体はよく知られているが、その転換過程の細部に注目し、個々の理論家の論理や思考法のレベルにまで分け入って丁寧に読み解くことで新たな知見をもたらしたことが本論の最大の功績であろう。ちょうど、科学史の領域で、コペルニクスやケプラーの思想の再検討により、近代科学の開拓者とみられていた彼らの思想が実は神学的宇宙観に深く根ざしていたことが明らかにされ、科学史像全体を大きく書き換えることになったのと同様、本論においても、音楽理論の「近代化」の過程の中で、単に古来の思考が近代的思考に取って代わられたという流れに回収できない多様な側面のあることが明らかにされた。中でも、ザルリーノやケプラーが離散量を基本とする旧来の数学的音楽理論の限界をこえるべく幾何学的な思考モデルを持ち込もうとしたことを明らかにしたこと、このようなコンテキストでは従来ほとんど取り上げられたことのなかった数学者メンゴリの思想を精査し、そこにある、近代的な美学思想にもつながる感覚的認識の自律性への志向をクローズアップしたことなどは、とりわけ顕著な成果である。音楽理論史のみならず、近代的な学問の成立史全般を考える上でも大きな示唆を与えることになろう。

テキスト解釈の細部などについて問題の残る点もないわけではないが、全体の論理展開に影響を及ぼすことはなく、本論の価値を損なうものではない。新たな知的展望をひらく労作であり、本審査委員会は、博士 (文学) の学位を授与するにふさわしいと認定するものである。